

野田中学校には、教員になって2年目のH先生がいる。1年目の教員には初任者研修があるが、2年目の教員にも2年次フォローアップ研修というものがある。先日、H先生に研修の1コマとして「2年目の教員に望むこと」というテーマで話をさせていただく機会があった。

制限時間50分間で、将来が嘱望される若い教員に何を伝えるか。かなり難しいミッションである。と思ったのだが、構想を練ったところ、あっという間にレジユメが出来上がった。私の中では、若い先生方に伝えたいことは明確になっていたようである。

項目は次の8つである。「1 なぜ教員になったのか」「2 どんな教員になりたいのか」「3 職能発達上の変化は経験3年目までに生起する」「4 20代でやるべきこと」「5 年間2～3回の研究授業」「6 記憶よりも記録」「7 学級通信『薫風』」「8 天ぶらをいつ揚げるか」

なぜ教員になったのか、そのきっかけを聞いたところ、H先生の場合は、お父様が教員であり、中学の頃から、将来は教員にと考えていたそうである。したがって、大学を目指す時点で教員志望だった。

どんな教員になりたいのか、現実とのギャップを聞いたところ、H先生のイメージでは、子どもたちはみんないい子で前向きなんだそうである。これはわかるような気がする。一般的に、教員になる人は、とりあえず勉強ができ、成績優秀でまじめなタイプが多いだろう。そうすると、子どもたちも自分と同じようだと思いつつも、個人差を気にする。

個人差はあって当たり前であろう。その個人差に対応するのがプロの教師である。差がない方が指導しやすいのはわかる。だが、自分の中学時代を思い起こせば、容易に気づくはずである。勉強ができる子がいれば、運動が得意な子、いつも明るくおもしろい子、おとなしく目立たない子など、個人差のオンパレードのはずである。

教員からすれば、コミュニケーションがとりづらい生徒もいるだろう。人間なのだから合う合わないもあるだろう。H先生に伝えたのは、「自分が担任でなければ、この生徒はもっと～だったかもしれない」という視点をもつことである。そうすれば、謙虚になれる。自ずとその生徒のためにできることをやっていくようになる。

「プライオリティ」という言葉も教えた。優先順位のことである。教員は、4つも5つも同時並行的に仕事を進めなければならない。H先生の場合で考えれば、学級担任、数学担当、管理主任、野球部顧問などである。これらをすべてうまくやろうとすると、結局はどれも中途半端になるか、自分がつぶれてしまう。これがプロジェクトのように、一つのことに集中できたとしたら、教員の仕事の質は格段に変わるだろう。まじめなのはいいが、まじめすぎるのはよくない。

今は、この仕事に時間とエネルギーをかける。この仕事は後でもいい。優先順位がわかるということは、仕事の見通しが立てられるということ、段取りがつけられるということである。すなわち、仕事ができる人である。

H先生に、生徒の前で「忙しい」という言葉を言ったことがあるかどうか聞いてみた。「ちょっと待って」とは言ったことがあるそうである。生徒に対して「今、忙しいから」などと絶対に言わないように、定年退職の日まで言わないように話した。同僚の前でも「忙しい」などと言うべきではない。忙しいかどうかは、他人ではなく自分が決めるものである。本当に忙しい人は、それを口にはしないものである。

(次号に続く)